琉球大学学術リポジトリ

4. 小学校5年生を対象とする事例

メタデータ	言語: 出版者: 島袋純 公開日: 2012-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮良, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25059

Ⅳ.小学校５年生を対象とする事例

アースの会　宮良弘子

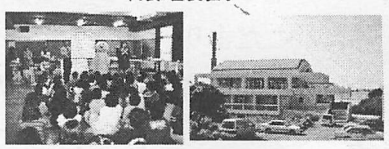
島袋：NPO の方々に担当してもらっているのですが、いよいよ 5 年生と 6 年生のあと後２人ですね。今日、話を聞いた後にまたワークショップっていう、交互にこの形態でやりたいと思います。これも横山さんとそれから自然環境コースの河名先生と事前に、詰めてこういう方式でやりましょう、ということで合意したのでこれは変えられないです。なるべく、分からないところは横山さんに最終的には全部聞き取って、分からないところは全部つぶしていくというつもりでいます。さらに 1 回は、少なくとも 1 回は実際に宇栄原小学校の３年生、4 年生、5 年生、6 年生の担当の先生に日程調整をして話を聞きに行こうと思っています。横山さんに聞いて宇栄原小学校に出向きます。もし、興味がある人は時間の都合が合えば、一緒に行ってもらってもいいと思います。では、今日はアースの会の宮良さん、よろしくお願いします。

宮良：はい。こんにちは。貴重な時間を頂きましてありがとうございます。私の名前は宮良弘子と言います。アースの会という市民グループです。私達の活動の目的はグリーンコンシューマーっていって、直訳すると「緑の消費者」です。環境に優しい消費者を増やすために情報発信したり、いろんな実践活動ができるように、みなさんと一緒に活動していこうというようなことを会の趣旨や目的としてやっています。私は、元々普通の主婦で、今もただの主婦ですが、今一番上の子どもが *19* 歳です。19 年前の沖縄っていうのは子育て中のお母さんってどこにも行く場所がなかったんですよ。行くところはあったけれども子どもを連れて歩いて、遊びに行く場所がなくて、トイレに行くのにも、自分が１人で、こうやって片方に赤ちゃんを抱いて、片方はトイレするとかってそういうふうな状況だったんですね。それから考えると、今のトイレにはベッドがついていたり、子どもを置けるような場所があったりとか、公民館でも、保育つきの講座とか、そういうものができているんですね。今はすごくよくなりました。その頃は何もない、本当に子育て中のお母さんっていうのはとても大変な状況だったんですね。その頃、集まったお母さん達と一緒に「こだまり」というサークルをつくって、子育て中のお母さんのために同じ「こだまり」っていう名前の情報誌をつくったんですね。ちょっとボロボロの本なので、今日は忘れてきちゃったのですが。あの、今「うぃず」っていう本が沖縄県でも売られていますけど、その前身なんですよ。なので「うぃず」の方達も私達に、こういう本をつくりたいけど、っていうふうに聞きに来ました。そういうふうな情報誌をつくったことがきっかけで、主婦の立場でいろんなことができるんじゃないか、ということで呼びかけられて、平成７年に那覇市のリサイクルプラザができました。南風原町新川にあります。ここの一番上の４階で市民のための啓発の活動をやりたいので誰かできないかということで、呼びかけられたのが、私と宇地原さんと一緒に子育て中のお母さんのための「こだまり」というサークルをつくりました。そのサークルの名前も「こだまり」で本の名前も「こだまり」。そういう人達だったら何か市民活動ができるんじゃないか、ということで那覇市の職員から呼ばれて、ここで環境のことをやってみないかというふうに始めたのが、12 年前の平成 7 年です。それがきっかけで私は環境に携わることになりました。その頃は本当に子育てで精一杯なただのおばさんだったのですが、今はどうにかこの 12 年です。環境のことを

一緒に学んだりとか、みなさんにこうやってお伝えすることができるようになりました。それでは、写真を使いますので、ちょっと座らせて下さい。これがきっかけでアースの会というものが立ち上がりました。私のほとんどメインの仕事といったらここの那覇市リサイクルプラザ、今もここがメインで活動しています。リサイクルプラザで、ここは那覇市の資源ゴミが入ってくるところ、分別工場ですが、ここの一番上のほうで那覇市の委託事業として、ゴミ減量のことをやりましょう、環境のことをみなさんに伝えましょうということで、ここを拠点に 10 年以上やっています。どんなことをやっているかっていうのを簡単に説明します。小学校４年生は社会の時間にゴミの問題を勉強しますので、必ず来ます。４年生が那覇市内と那覇市外であれば、こういう大きなゴミの工場がないところ、南城市だとか、与那原町とか、そういうところからも来ます。だいたい年間一万人近くの来訪者が来ます。そういう子ども達、婦人会、団体を対象に、見学の対応を私達のスタッフでやっています。現実にはもう口頭でみなさんにお伝えしています。洋服とかそういうのはもったいないから本当に資源ゴミに出さないで、みんなでお下がりにしたりとかして大切に使って下さいねってお願いしているのですが、やっぱりそれでも使えないものもありますのでそういう古着を使って、藍染めをしたり、草木染めをしたり、あとはこれを裂いて、織物の糸にしたりとかそういうふうな講座を、リサイクルプラザでやっています。私達のスタッフ 10 名ぐらいの仲間で、講師をやったり見学対応をやったりとかそういうふうなことをやっています。どんどん委託事業が増えてきて、当初はリサイクルプラザの事業だけでしたが、最近は那覇市に新しい焼却炉ができて。開邦高校の目の前に私達の活動場所がありますが、那覇市のゴミの処分場もあるんです。去年の４月から本格稼働した那覇市と南風原町の新しい焼却炉のガイドもやっています。当初はたった２人で始めたアースの会ですが、それが今、専従スタッフが 20 名ぐらいになって、子ども達の見学対応をやったりとか、先ほどお見せした講座の講師をやったりとか、そういうふうなことをやって、だんだん仲間が増殖してきています。

去年の琉大の学園祭でも使っていただきましたが、これエコフレンド号っていって、この中に何が入っているかというと食器、食器洗い機が搭載されています。食器洗い機を搭載したトラックです。これをそのままイベントに貸します。約１分で 20 枚から 30 枚のお皿がガーッて洗えますので、お祭りのときに使い捨ての容器を使わないで、繰り返し食器を使うということができるんですね。そうすると大きなイベントでも、容器のゴミが出ない。容器のゴミが出ないっていうことイコール、みんな食べ切っちゃうんですね。使い捨ての食器を使うと、何か残してもいいかな、っていう雰囲気をつくっちゃうんですけど、洗うとなると自分が食べ残しを出さない。そういうふうな相乗効果もあって、すごくゴミが減るということで、これも那覇市の委託事業でやっています。那覇市の一千万以上の委託事業を、この２人のおばちゃんから始めたのですが、いま、事業として広まってきています。それ以外には、学校に来て出前講座をやってくれないか、ということが７年前ぐらいから学校から依頼されるようになっ

アースの会（5年）
代表：宮良弘子



那覇市リサイクルプラザ4階では、"アースの会"が地球環境に負担をかけない暮らしの情報発信やグリーンコンシュマー（環境市民）を増やすための活動をしています

て、委託事業ではなかったのでほとんどボランティアでやっていましたが、那覇市のほうから予算をつけようということで、那覇市内であれば予算をつけてもらって出前授業をやっています。実はこれ、制服を着ていますが私達の仲間のおばさんです。子どもの役をやって劇をやったりとかですね、あとエコクッキングをやったりとか。環境に優しい調理をしようって、いろんなメニューを考えて子ども達の前でやっています。これが、私達のメインの仕事です。お金が入ってくるといえば委託事業がほとんどですので、これで一応私達の活動資金というのは賄われています。

いよいよこれから宇栄原小学校の話になります。横山さんはもうご存知だと思いますが、4年前に那覇市の小禄のほうにある宇栄原小学校の校長先生になりました。横山校長にお願いされて今年で4年目、宇栄原小学校の環境教育に携わっています。なぜこの先生から私が頼まれたかというと、この校長先生は、以前は那覇市の職員でした。いまは民間校長、沖縄県で初めての民間校長といわれていますが、その前は那覇市のゼロエミッション推進室、そこの室長だったんですね。その前はNPOセンターの所長でした。それでこの方は、市民グループをサポートする仕事、それと環境に関わる仕事、この2つを校長先生になる前にやっていました。まだ横山さんの時代に、私がこういうふうにもう10年以上この仕事していますので、いろんなシンポジウムで会ったり、個人的なお付き合いもありました。たとえば沖縄県の環境教育とかっていうようなシンポジウムがあるとすると、私がパネラーになって、横山さんは司会者やメインのコーディネーターとかになるんですね。そうすると、いろんな話が出てくるんですよ。学校での環境教育をどうしたらいいか、っていうふうな話をすると、あんまりいい話じゃないんですけど、学校っていうのは敷居が高いよねって。学校の先生って外から人を入れないよねっていう話、それが第一に来る。あと、学校には予算がないよね、と。自分達は給料もらってくるくせに、外から来る人にはお金出さないよね、という話。それから、こういうふうな出前講座で行ったとしても1回しか呼ばれないので、全然実践につながらないよね。1回しか呼ばないので、ただの机の上の学習であって全然これを実践につなげようとしないよね、と。そういうふうなことばっかりが出てきて、本当に学校の先生の悪口ばっかりのシンポジウムを何回もやったんです。たぶんこれで、校長先生になる前の時代に、やっぱり教育っていうのは実践をしなきゃいけない。外から違う風を入れなきゃいけないっていうことをとても実感して、私以外ですよ、もちろん私以外のNPOでも。一緒にシンポジウムやりますので。この意見は私だけじゃありませんので。いろんな地域でいろんなことをやっているNPOの方達と同じような意見をもってですね、前回の古我知さんもこういうふうな話をされたかどうか分かりませんけども、同じ意見をもっていたんですね。それで、どうにかしたいよねっていうことで、そうしたらいつの間にか校長先生になっていたんですよね。民間校長になる人が1人できたっていうのは聞いたんですけど、まさかこの人がなっているとは思わなくて。本当に知らない内に試験を受けて、先生になっていた。ビックリしましたが、この人が先生になったことでずいぶん変わるだろうな、ということを私は予想しておりましたが、私はこの4年間宇栄原小学校に赴任して、かなり変わったと思っています。

もうお話されたかもしれませんけど、横山さんがなぜ校長になりたかったかっていうのはいろんな理由があると思います。『みみずのカーロ』の話はされましたか。されてないですか。『みみずのカーロ』という本があって、これは、合同出版から出ていて、今泉みね子さんという方が書いた子ども向けの本です。こんな簡単に書いてありますけど。この方はドイツのフライブルグというところに住んでいて、これは実際にある学校の、実際にあった話です。ドイツは言わずと知

れた環境の国というふうに言われていますが、そういう国でも、やはりゴミがたくさん出てきたので、ベルリン川小学校でしたかね、そこの学校でゴミを減らさなきゃいけないと。すごくきれいな土地なのに、裏に産業廃棄処分場ができるという噂があったらしくて。そういうふうなことではいけないと。あのワインをつくるブドウ畑があるのに、こういうふうな処分場をつくらせてはいけない、ということがきっかけだったらしいです。だったらどうやったらゴミが減るんだろう、ということをやったらしいですね。そのゴミを減らすのに、まずリサイクルしよう、から始まったんですね。日本も今そうですよね。リサイクルしよう、から始まったんですが、実はリサイクルではゴミが減らないんです。先ほど私が言いましたように、資源ゴミでみなさんがどんどんものを出しますけど、リサイクルする場所がなければ、それは焼却処分になってゴミとして捨てられちゃうんです。最終的にものっていうのはリサイクルしても、ものはゴミになりますので、そういう問題ではないんですよね、リサイクルではないんですよ。それを子ども達にどうやって知らせたかというと、シェーファー先生という校長先生が、みみずを飼うことにしたんですね。こういうふうなみみずの家をつくって。このみみずの家の中にゴミを入れていったんですね。リサイクルできるからアルミ缶も入れよう、スチール缶も入れよう、生ゴミも入れよう、木も入れてみよう、草も入れてみようということでいろんなものを入れていって。みみずが分解してくれたのは何かといったら、自然が分解してくれる草と木とか、食べ物ですね生ゴミとかそういうものは分解してくれたけど、リサイクルできるはずのアルミ缶とかスチール缶は全然食べてくれない。最終的には土には戻らないもの。そういうものがこの実験で分かったんですね、みみずを飼うことで。ということは、どんなに人間がアルミ缶とかスチール缶とかペットボトル、プラスチックをリサイクルしても最終的にこれは土には戻らないものなんだということをこのみみずを飼うことで子ども達が分かったんです。じゃあだったら、リサイクルしても最後ゴミになるんだったら、そういうものを買わないようにしようということで、例えば飲み物の容器なんかはアルミ缶とかスチール缶とかペットボトルを買わないで水筒を持ち歩こうとか、弁当箱の中にはアルミホイルとかラップなんかは使わないで、お弁当をつくろうとか。そういうふうなことを工夫しだしたら、その結果、この学校はゴミ箱一個だけ。学校内にゴミ箱一個だけになった。そういうふうな実話に基づいた話が書いてあるんです。この本に横山先生は感動されて、こういうふうな校長先生になりたいということで校長になったという話を私は伺って、すごくビックリしたんです。実は私も今泉みね子さんが書いたこの本にすごく感動して、この人に会いに行ったんです、ドイツに会いに行って、それで今泉さんにレクチャーを受けて、ドイツってすごいなぁって話から、でもドイツもすべていいわけではないですってことまで。ヨーロッパが素晴らしいと言われていますが、実際には日本だって江戸時代は本当に循環した暮らし方をしてて、ゴミなんか一切なかったですね。うんこも、ゴミを燃やした灰も、すべて肥料にしたり、本当に循環型だった。今の日本がおかしいだけで昔は日本って素晴らしかったんですよ。だからヨーロッパだけが素晴らしいっていうわけではないのですが、ヨーロッパはゴミを最初からつくらないっていう生活はしているし、ものを売るときも過剰包装がないとか、何回も使えるペットボトルがあったりとか、そういうふうな暮らしをやってきて、真似すべきことは真似したいなぁ、この学校素晴らしいなと思って。私もチャンスがあればこういう本を紹介しています。

横山さんと私はもうかなりの長いつきあいで、宇栄原小学校に来て下さいということで、4年前に行くことになりました。この宇栄原小学校だったら何回もチャンスがあるということで、チ

ャンスがあるんだったら何回もやらせてもらおうかっていうことで、いろんなことをさせてもらいました。まずは、いろんなレクチャーから始めました。燃やすゴミの中で一番多いのは何かお分かりになりますよね。重さの中で一番多いのは生ゴミです。紙ゴミなんかも多いですが、生ゴミが一番多いです。あと容量嵩でいうと、こういうふうなビニール袋だとか、お肉のトレーなんかのプラスチックが容量では多いですが、重さの中ではやはり食べ物が、食べ残しが一番多いです。食べ残しをはじめとする生ゴミが一番多いので、それをどうにかしようっていうことで子ども達に、まず食べ残しをしないという、そういうふうな調査から始めて、どうしても出てしまうような食べ残しだとか、野菜のクズだとか、あと給食の時間に出てくるようなバナナの皮、あんなものまで食べろとは言いませんので、そういうものもどうにか処理をしようっていうことで、子ども達に夏休み前までゴミの処理をしてもらったんですね。生ゴミのコンポスターの処理をしてもらって、それをどうしたかっていったら、処理をするだけじゃなくてリサイクルは循環の輪をつくらなきゃいけないっていうことで、リサイクルしてコンポストをつくったものは3ヶ月ぐらい生ゴミの処理をした後に、3ヶ月ぐらいはずっとやりっぱなしにしておいて、完熟堆肥をつくって、12月頃に学校の裏の畑に、堆肥と土を混ぜて野菜づくりをしようっていうことで、本職のお百姓さんを呼んできて、一緒にこういうふうな畑づくりをしたんですね。その時に、私すごく感動しました。その間にもいろんなレクチャーするんです、生ゴミ以外に地球温暖化のこととか。またこの方以外のお百姓さんを呼んで、畑にどんな生物がいるかとか、いろんなことをこの12月までにいっぱいやったんです。ここで、畑の耕す作業をやっている時に、土から虫が出てきたんですよ。いろんな虫が出てきて、ある子どもは、「ぎゃー」とか言って、「殺せ、殺せ」とか言い出したんですが、ある子が「この 12 月まで何ヶ月も自分達環境のことをやってきたじゃないか」と。環境っていうのは自分達が生きるだけじゃなくて、動物とも共生しなきゃいけないっていうことも、一緒にお百姓さん呼んでやったんですけどね。ちっちゃな虫でも、私達は地球上に暮らしている仲間ということを教えてくれたお百姓さんがいて、そのことを思い出した子どもが「自分達環境やっているのに何で虫殺すか」って言って、「この虫も私達の仲間でしょ」っていうことで、それで殺さなかったんですね。それでみんな何か納得しちゃって。「じゃあ殺さないでおこう」っていうことでどっか端に寄せたんです。それで、その子どもの言葉を聞いてね、この環境教育やってすごく良かったなぁと。環境はゴミを減らすだけだとか、地球温暖化のことをやるだけじゃなくて、地球全体の一緒に住んでいる動物も一緒に共生しなきゃいけないということを学んだんですね。それをある子どもが言ってくれたので、私は4年前のこの数ヶ月間、やってよかったなぁとすごく思ったんです。畑仕事をした3月頃には、人参、玉葱、赤カブとかいろんな野菜実りました。それで、何をやったかっていったら、最後に食べることばっかりやったんです。収穫したものでサラダをつくったり、人参の葉っぱでヒラヤーチーをつくって食べたりしました。肉も前回の講師の古我知さんが話していた「くいまーる」っていう、あの生ゴミを豚の餌にしてできた豚肉も貰って、最後の3月はすごく楽しいパーティーをして終わりました。

その間にはお百姓さんの方を呼んで、動物の共生を学んだり。あと長嶺先生という獣医師の方、ヤンバルクイナを守ろうっていう動物の保護やっている先生ですが、その方も呼んで、ヤンバルクイナの保護の話をしてもらったりとか。あとですね、今泉真也さんていうその写真家の方がいて、山原のほうの動物を撮っている。動物とかちっちゃな小動物とか自然を撮って、その写真でみなさんに伝えたりしている方がいるんですけど、そういう方も呼んで、自然の大切さをみなさ

んに、子ども達に言ったりとか、そういうふうなこと、いろんなことをやったりしました。あと、夏休みの前にはこういうこともやりました。本当食べることばかりやっていたんですけど。これはエコクッキングっていうことで、子ども達に「カレーをつくろう」ということで、これが一つの目的だったんですけど。つくる間に節水をしましょうと。電気を使わないようにしましょう。エネルギーを使わないようにしよう。ゴミを出さないようにしよう。そういうふうなことを目標にやったんです。そしたら、まずこの子、ジャガイモ剥いて洗っているんですけど、「節水するんだよ」って言ったら、何にも言わないでこの子はボウルに水を溜めて、タワシでゴシゴシ洗い出したんですね。普通だったら水ジャカジャカ使って洗うんですけどね。この子はこういうふうな工夫をしてお水を使わないっていうことを、自分で工夫をしてやったんですね。もちろんカレーをつくるので煮物をしなきゃいけない。こうグツグツ煮なきゃいけないのですが、材料を切った後に、これはちょっとこちらから指導したのですが、煮る時に、ガスで一回沸騰させます。その後すぐ火を止めて、新聞紙で包んで、布で包んで、3〜40分やりっぱなしにするとジャガイモも人参も、玉葱も全部煮あがっているんです。だからグツグツ煮る必要がないぐらいの、すごい保温力があります。そういうふうなことでエネルギーを使わない、ガスを使わないという、そういうエコクッキングができるんですね。あと、本当は、全部まるごと使いたかったんですけど、わざとこういうことしたんです。食材を買う時に、地産地消っていう言葉をみなさんご存知ですか、　地面の地に産物の産ですね。あと、地面の地に消費の消。地産地消って言うんですけど。地元のものを買おうっていうことを私達はみなさんにお願いしています。自分達が食べるものは地元のものを買えば、もちろん輸送コストもかからないし、輸送のエネルギーもかかりません。近くでつくっているので、誰がつくっているかっていうのも分かるんですよね。だから農作物をつくっている人と顔の見える関係をつくることができる。そうすると、安全なものをつくってね、ということを伝えることができるんですね。そういうことが地産地消って言うんですけど、地元のものを買って、できるだけ農薬を使わないものを買いましょう、っていうことをこの時に言ったんです。なので、本当は丸ごと食べたかったですが、わざと皮を剥いて、本当は食べちゃうんですけど皮も。これは安全なものなので。これ、小麦粉と塩をちょっと混ぜて、油で揚げると、人参とジャガイモの皮のチップができて、みんなパリパリ揚げあがるので、ポテトチップみたいな感覚で全部食べちゃったんです。そんなふうにして、本当に生ゴミが出ない、そういうふうなエコクッキングをやるんですね。あと、この2時間の中にこういうこともやるんです。これ見たことありますか。ソーラークッカーっていって、太陽の光でエネルギーをつくり出そうっていうことで、日本は本当にエネルギー自給率が数パーセントしかありませんよね。石油も石炭も残り少ない。化石燃料を使えば地球温暖化という問題も起こりますので、できるだけ自然エネルギーを使ってみよう。もちろん省エネが最初ですけども、その後に自然エネルギーを使いましょう、っていうことで太陽光発電や風力発電とか。大きなものは自分達は消費者だからできませんけど。こういうものができますよ、っていうことで太陽の光でも凄い力があるんだよっていうことで、分かるた

エコクッキング

めに買ったものです。太陽エネルギーでできるソーラークッカーです。ここのところにちっちゃなクギみたいなのがあって、この釘の影がちょうどその釘に当たれば、そこに集中して太陽の光が入ってくるという。これはポップコーンつくっているんですね。約 30 分でご飯 2 合が炊き上がるんです。これを一緒につくったんですけどね。こういうふうなことをやると子ども達すごく喜ぶんですよね。こういうことで自然のエネルギーって凄い力だなって。はっきり言ってあまりおいしくないんですよ。ご飯はジャーで炊いたほうがおいしいですが、何故か、みんなこれ食べ尽くすんですよ。先生達がすごいビックリしたのは、スープやジャガイモの皮のチップ等をみんなでつくって、全部食べ尽くすんですよ。給食は食べ残しはするけどもこれは全部食べたということで、先生達がビックリして、やっぱり自分でつくるのは違うんですねって言って驚いてたんです。やっぱりみんなで協力して、みんなで工夫してつくったものっていうのはおいしいんだと。これ不味いんですよ本当は。不味いんだけどおいしいっていって食べたというのは、そういうふうな精神的なものもあるのかな、というふうに思いました。そういうことで、4 年前の 4 年生はエコクッキングをやったりとか、生ゴミ堆肥で畑づくりをやったりとか、外部の講師の方を呼んで、地球温暖化のことをやったりとか、山原の自然を勉強したりとか、あと動物との共生をやって共生の大切さ、そういうことを学んだりとか、4 年前の 4 年生は一年間はいっぱい詰め込んでみんなに学んでもらったんですね。そこで分かったのは、子ども達は食べ物が好きだということ。食べることが好き、食べること・つくることが好きということが分かったので、4 年生の時の一年間の基本がある程度できているので、じゃあこの子達が 5 年生になった時に、集中的に食べ物づくりやってみようっていうことで、何をやったかっていうと、この時はたくさん授業時間があって、4 年生合同でやったっていうことがあっていろんなことができました。今度はクラスごとでやるということで、回数としては少なくなりましたけども、3 クラスいっぱいやりましょうね。私達としては行く回数は同じですけど、受ける回数、子ども達が受ける回数はちょっと少なくなりますけど。自分達が食べるものは自分達でつくろう。やってみようよ、っていうことで何をつくったかというと、自分達の伝統食つくろうっていうことで、お味噌つくりました。大豆の自給率なんかもう本当に少ないんですよ。ほとんどもうアメリカの大豆だったり、中国の大豆だったりとかして 10 パーセント切っていますので、それをどうにか自分達でつくろうよっていうことで、味噌づくりをしたんですね。さすがに、麹を自分達でつくるっていうのはちょっとそこまでの手間はかけられないので、恩納村のほうで仲西美佐子さんという方が、自分で石鹸をつくっている方で、お百姓もやっている方です。何で私がさっきからお百姓というふうにこだわっているかというとですね、百姓っていう言葉、百の姓名の姓ですよね。ということは、百の職業をもっているっていうことがお百姓っていう元々の語源だそうですが。お百姓さんというのはいろんなことができる方らしいんです。お百姓って農業だけじゃないんですよ、いろんなことができる方です。その仲西美佐子さんというお百姓さんが、石鹸もつくって売っていて、こういうふうな麹づくりもやっていて。その方にお願いして麹を購入して、その麹を使って味噌づくりをしたりとかですね。自分達もとってもおもしろいですよ。この甕に味噌だまをつくって、初めてつくることですので本当に共同作業なんですよね。それから島豆腐をつくりました。この時も自分達が食べる豆腐は、もちろん大豆もそうですが、豆腐を固めるものは何かご存知ですよね、にがりですね。この島豆腐のゆし豆腐です。つくる時ににがりは買ってきませんでした。海の水を取ってきました。その水も、波之上の水と、玉城の水と山原の水を持ってきて、どれを使うか、って質問

して。波之上の水は、この辺のオイルが浮いて汚い水で、さすがにこれはやめようということで。3種類の水の中で一番良かったのは、南部の水が一番キレイだったですね。山原の水は台風の後だったせいかですね、ちょっと濁っていたので、南部のほうの水を使って。ガーッとお豆をミキサーで挽いて絞った汁を煮立たせて、海水をかけるだけで固まるんですね。子ども達ビックリして、固まったっていうことで。それで固まったものにだし汁と混ぜてゆし豆腐をつくって食べる、ということで。とてもとても本職のゆし豆腐には負けますけど、自分達がつくったものは何よりも、最高においしいものなので、子ども達は全部完食ですね。こういうふうなことをやって、それ以外にはヒラヤーチーをつくったりポーポーをつくったりとか、お米を炊いてご飯をつくった時もあります。最後にできた味噌で味噌汁をつくって食べる。ほんと食べ通しですけど、こういうふうなことをやって、一年間終えました。去年も別の 5 年生ですが、同じことをやりました。言うのを忘れましたが、食べるものをつくる前に、何をやったかというと、フードマイレージっというのがあって。スーパーのチラシ等を持ってきて、チラシのなかから産地が書いてある肉や魚のチラシを切ってもらって、それを世界地図に貼っていくんですね。そうすると何が分かるか、というと、日本の私達が食べているものが外国からいっぱい来ている。お魚は、遠くはアフリカのほうから来ているし、野菜なんかは南米から来ていて、鶏肉なんかはブラジルから来ている。私達の食料自給率は 40 パーセントしかありませんので、60 パーセントはこうやってすごく外国に頼っている。頼っていていいのかどうか、頼っていて外国から食べ物をコストもかけて、エネルギーもかけて持ってきていいのかどうか。そういうことも考えてみようっていうことで、食べ物をつくる前にこういうふうなフードマイレージのワークショップをやったんですね。そうすると子ども達から何が出てくるかっていったら、4年生、5年生だからほとんどは「大変だと思います」しか出てきませんけど、数人がキラッって光るようなワークショップの発言があるんですね。「自分達が食べるものは自分達でつくらなきゃいけないんじゃないか」と。そういうふうな発言があると、これがだんだんだんだん引き続いて出てきて、自分はお百姓さんにはなれないかもしれないけども、農業だとか畜産業とか、そういうものを支える消費者になれるかもしれないと。そういうふうなことにつながってくるんですね。ほとんどチラシを切り貼りすることだけで、楽しいで終わってしまいますけど、ここからこんなことやったんだな、っていうことを思い出すきっかけづくりっていうかな、そういうことにつながってくるかなっていうふうに思って、去年も一昨年も 5 年生の最初の日にはこれをやりました。

私達が、出前講座とか環境教育に携わって、十何年この活動をやって、学校に入りだしてから 7 年ぐらいかかっているんですけど、私達が目標として伝えたいこと、やりたいことのこの 3 つの柱があってですね。まず、みなさんや子ども達にお願いしたい 1 つ目は、事実を知って下さいということで、環境の問題をやるにあたってはまず情報を知らないといけないし、こういうことがなき

ゃいけない、こういうこと知っとかなきゃいけないよと。専門家からいろんな話を聞かなきゃいけないよということで、それで宇栄原小学校には外部から私達の仲間を呼んで、お話をしてもらって。動物の話だとか、地球環境の話とか、本当にいろんなことをやって、知ってもらって。外部としてできる、NPO として私達がずっと一年間その子ども達を毎日 365 日見ることができれば、２番目ができるんですけど。私達がせいぜい行っても何十時間しか行きませんので、できることは１番目の事実を伝えることだけなんですよ。２番目にお願いしたいのは、この環境のことで実践してほしいんですよ。その実践するということが外部から行った NPO はなかなか続けてできないんですよね。これを先生方にお願いしたいと思っているんですよね。なので、先生達も一緒に、環境のことを私達と一緒に学んでもらっているので、その後をどう先生達が私達のやったことを伝えてもらっているのか、実践につなげてもらっているかっていうところが、私達がまだ未消化の部分なんですよね。先生がどこまで子ども達を導いてくれているのだろうか、そこもまだ分かってないところです。あと、子ども達が実践するのには、学校の現場だけではなくて、家庭の現場も、家庭にも伝えてもらうということで、私達が伝えたことがどれだけ子ども達に伝わっているかっていうことも、すごく今知りたいということです。宇栄原小学校で４年間やっていますが、今、宇栄原小学校でも、PTA のほうで環境部ができて、実践が始まっていますので少しは家庭にも浸透し始めてきているのかな、というのが嬉しいです。家庭と学校の現場の中でどれだけ実践につなげることができているのかな、ということが、私達が今知りたいというところです。それであと３番目ですね。これは究極のものですが、伝えるということで。みなさんに環境教育の事実を知って実践をしてもらって、３つ目がすごく難しいですが、伝えるっていうことを子ども達にこうやってほしいなと思って、これがまだできてないです。今年の５年生は、これをちょっとやってみようかなと思うのですが、どういうことかというと、今年もこれから今度の新しい５年生に始めますけど、子ども達にはまずこういうふうなことをやります。２番目に実践できるようなワークショップをやります。そこから先生とか生徒に伝えるということを、先生や親が実践できるような形でもっていってもらおうと思っています。で、３番目に伝えるということをやってもらおうと思っています。子ども達に手紙を書いてもらったりとか、新聞の投稿をしてもらったりとか、いろんなところに意見を言ってもらう、そういうふうな発表の場所を設けてもらおうかなと思っています。というのは、環境問題っていうのは、１番目だけやると頭でっかち、評論家ですよ。評論するだけであんた悪いね、この人いいねって言うだけですよね。じゃなくて、これを知ったらじゃあ私は何ができるわということをまずやらなきゃいけないですよね。できることからやるということ。ここまではある程度できるんですけど、３番目が私がやっていることをみんなに伝えて広めなきゃっていうことで、よくケチャップに例えられるんですけど。ビンのケチャップはなかなか出てこないですよね。でもいったん出てきたらドバッと出てくる。それと同じように今の環境問題っていうのは、まだ日本の場合は出てこないケチャップ状態ですよね。だけど今、もうちょっと頑張ればドバッっと広がる状態にきてはいると思うんですよね。グリーンコンシューマーっていう環境に優しい消費者と言われているのは、１パーセントぐらいしかいないと言われているのですが、それがケチャップ状態でドバッっと広がれば、本当にどんどん浸透していくと言われているので、今度の子ども達にはこれをお願いしようと思っているんですね。例えば、スーパーなんかで過剰包装しているんだったら、過剰包装をやめましょうというような、そういうふうなお手紙を子ども達に書かせるとかですね。あとは、議員さんでもいい

ですよね。こういうふうな、あの学校の現場だけど、宇栄原小学校みたいな学校が増えるように環境教育もっと増やしませんか、というようなお手紙を子ども達にどっかの議員さんに書かせるだとか。あとは、新聞の投稿ですね。今新聞でもいろんな子ども達の欄がありますから、そういうふうな投稿に、自分の学校こんなことやっていますからみなさんの学校はどうですか、とかそういうふうなことをみんなにさせるとかですね。あとは、企業とかにも、今日ちょっとペットボトル持ってこなかったんですけど、ヨーロッパには何十回も使えるペットボトルがあるんですよね。そういうふうなペットボトルを、コカコーラとかペプシの会社につくってみませんか、とかっていうふうなことを子ども達に書いてもらうような、そういうふうな手紙でもいいですよね。これがまた国語につながりますよね。手紙書くって国語の教育にもつながりますよね。そういうふうなことを今度の5年生ではやってみたいなというふうに思っています。なので、環境教育っていうのは、この『みみずのカーロ』の本にも書いてあるんですけど、環境だけじゃないんですよ。いろんな分野に広がっていて、この本の最後は何につながっているかっていったら、まちづくりにつながっているんですよ。このまちを好きになるっていうことになって、このまちのガイドを子ども達が引き受けて、そのまちの人達を巻き込んで、まちをキレイにして、まちを活性化する、そういうふうな話に最後もっていくんですよ。環境からまちづくりに広がっていく。最終的には私はこれは国語にもつながってくる、子ども達に文章書く力もちょっとつくかなと思っているのですが。全てにつながっていくんですよね。環境から国語の問題、環境から社会の問題とかいろんなものにつながっていくような感じでやっていきたいなと。今年はそういうふうにやっていきたいな、と思っています。ということで、私も一方的に話をしてきたので、いちおうこれで私の話を終わりにして、逆にみなさんから話を聞いて答えた方がいいかな。今日は宇栄原小学校の環境教育ということなので、これに特化してお話をしたのですが、夕方で疲れていると思うので一方的に話を聞くのも疲れちゃうんで、私が言ったことに対して、質問してもらったほうがいいのかなと思います。

学生：最初の年は学校の先生方もひいていたっておっしゃっていたのですが、初年度の4年生の授業をつくっていく時に、どのように先生と協力してプログラムをつくっていったのですか。

宮良：今年で4年目ですが、過去3年間ですよね。3年間なので、1年毎に先生が変わるんですよね。これがすごくまた難点ですね。最初の4年生の時の先生は、最初はすごく引かれて、ウワァーってされたんですけど、私達が何回も何回も足しげく通って、次はこれします、次はこれしましょうって言って、情報をどんどんどんどん伝えていったんですね。伝えていって、それでこの先生方がとても良かったのは、もしかしたら理想的じゃないかもしれないんですけど、自分達は生徒と同じ立場でいましょう、というスタンスでいてくれたんです。それで全部、私達に進行も全て任せてくれました。まったく環境のことなんて初めての先生達ばっかりだったので、まず傍観者でいるしかないですよね。傍観者でいるしかないので、先生達は私達のやることを、全部見守ってくれた。その代わりに、私達が必要なものとか、必要なやるべきこと、そういうことは先生にお願いして、時間だとか場所の設置とかセッティングとか、そういうものは全て先生がやってくれます。でも全ての進行も内容も私達に任せてくれました。良く言えばとっても好意的にとってくれて、悪く言えば全てお任せ状態だったというので、どっちが良かったかっていうのは

分からないですが、私達にとってはとっても良かったです。でも逆に、私達は 4 年生でしたが、3 年生、5 年生、6 年生とかは、他の NPO が入っていますが、他の NPO は先生達が主体でやってくれなきゃ困る、という NPO もあったんですよ、実は。

島袋：これは、それ以前の出前講座の蓄積でプログラムがある程度蓄積されていたから通年で、授業をつくれたということですか。

宮良：そうですね。

島袋：通年って聞くと、最終的には何時間ぐらい使っているんですか。

宮良：全部の総合計の時間ですか、合計の時間でいったら相当の時間ですよね。

島袋：総合学習っていうのはだいたい百時間とかですか。

宮良：そうですね。でもそんなには使ってないですね。だいたい 57 時間から 77 時間ですね。アースの会では年間平均 40 時間出向いています。

島袋：それは、アースの会でプログラムをつくって、主体的に関わって進めているんですか。

宮良：プログラムは、私達ができないところもありますので、例えば、山原の自然のことは、私達の仲間から、知っているカメラマンやお百姓さん呼んできたりとか、仲間を連れてきています。

島袋：でも、その前の年までの蓄積では 40 時間のプログラムはつくれないですよね。新しくつくったのですか。授業用意するのはとっても大変じゃないですか。

宮良：とてもできないです。もちろんそれもあります。大変ですよ。だから 4 年生の時どうしようかな、っていうのがあったんです。先ほど言いましたように学校は 1 回しかないとか、敷居が高いとかって言って、自分達ガンガン言っていたくせに、実際にはどうぞって言われた時に、ヤバイどうしよう、プログラムないよっていうことになって。それでもやってみたいっていう気持ちのほうが強かったんですよ、大きかったので、1 年間ある内にある程度の簡単なプログラムはつくったんですけど、じゃあ実際に誰を呼ぼう、実際に何をやろうかっていうのは、あの時はまだ 1 学期、2 学期、3 学期ですよね。1 学期の間にいろんなプログラムを自分達でその場でつくったんですよ。ちょっと行き当たりばったりっていう、そういうのもあるんですけどね。ちょっと悪い言葉使うと、最初は実験段階みたいなところもあったんですよ。でもそれが意外と、子ども達とすごく仲良くもなれたし、先生はこういうふうな気持ちなんだということもよく分かったし、何回も何回も行くことによって、初年度の 4 年生の 1 年間のおかげで、これはあんまりおもしろくない、これはすごくウケルんだと、これはこうしたほうがいい、ということがこの 1 年間で私達が教えてもらったっていうこともありましたね。